

日中語における複雑述語の対照

—行為目的型複雑述語を中心に—

A Contrastive Study of Complex Predicates in Japanese and Chinese: Focusing on Purposive Complex Predicates

朱 茜
ZHU Qian

This paper provides a contrastive study of purposive complex predicates in Japanese and Chinese. Purposive complex predicates consist of a purpose element and a motion verb. The two languages in question, however, show differences in the syntax and semantics of purposive complex predicates. First, the Japanese purposive complex predicate is constructed by the structure “a purpose element with the dative particle *ni* plus a motion verb,” while the Chinese equivalent is made of “a motion verb plus a purpose element.” Second, the purpose element in Japanese purposive complex predicates can be a simple or compound verb, a causative or passive verb, or an action noun. However, the purpose element of the Chinese purposive complex predicates is limited to simple or compound verbs. Third, interpretation of Japanese purposive complex predicates is the same regardless of the positions of location nouns or co-participants, while interpretation of Chinese purposive complex predicates differs according to syntactic structure. Fourth, the purposive complex predicates of the two languages show differences in the way in which they imply accomplishment of purpose. In Japanese purposive complex predicates, it is not obvious whether the purpose action is completed (in other words, this depends on context), whereas in Chinese purposive complex predicates the accomplishment of the purpose action is determined by the position of the perfect particle *le*. Thus, syntactic structure is strongly related to semantic interpretation of Chinese purposive complex predicates.

キーワード： 行為目的型複雑述語 構成要素 場所名詞 共同参与者 動作の実現状況

Keywords: Purposive complex predicates, Component of complex predicates, Location noun, Co-participant, Accomplishment of action

1. はじめに

日本語と中国語には、移動動詞¹を伴って行為の目的を表す複雑述語がある。

- (1) 休日に遊びに行く。
- (2) あの人は診察を受けに来る。

例文 (1)(2) のように、動詞「遊ぶ」「受ける」の連用形は助詞「に」と組み合わせさせて行為の目的を表し、移動動詞の前に置かれ、複雑述語になる。本稿では、日本語において、「遊びに行く」「受けに来る」のような「目的要素+に+移動動詞」という構造を用いて行為の目的を表す複雑述語を行為目的型複雑述語と呼ぶ。

- (3) 周末 我 和 他 一起 去 旅行。
(週末 私 と 彼 一緒に 行く 旅行する)
「週末に私は彼と一緒に旅行しに行く」

- (4) 那个 人 是 来 接受 审察 的。
(その 人 は 来る 受ける 審査 形式名詞)
「その人は審査を受けに来る」

例文 (3)(4) において、動詞“旅行”“旅行する”“接受”“受ける”は“去”“行く”“来”“来る”の目的を表す。本稿では、中国語において、“去旅行”“旅行しに行く”“来接受”“受けに来る”のような行為の目的を表す複雑述語を行為目的型複雑述語と言う。

本稿は「遊びに行く」「去旅行」のような複雑述語を研究対象とし、日中語における行為目的型複雑述語を対照し、両言語の相違点を研究する。第3節では、日本語と中国語における行為目的型複雑述語の構造に着目し、考察する。第4節では、行為目的型複雑述語構文の中に場所名詞や参加者が明示される場合、日本語と中国語の相違点を分析する。

2. 行為目的型複雑述語に関する先行研究の概観

本節では、行為目的型複雑述語に関する代表的な先行研究として荘司 (1997)、岸本・由

¹ 松本 (1997: 128) では、「移動とは時間の経過に伴って起こる物体の位置の変化である」と述べている。三宅 (1996: 143) での移動動詞は、「移動を表す動詞」を指す。影山・由本 (1997) では、日本語の移動動詞を「起点/重視の動詞」と「経路重視の動詞」の二種類に分けている。朱蓓 (2007: 59) では、“位移动词是根据是否具有“位移”这个语义特征得出的小类”（移動動詞は「位置の移動」かどうかという特徴によって分類される）と指摘している。本稿では、「行く、来る、走る」などのように、移動を伴う動きを表す動詞を移動動詞と呼ぶ。

本 (2014)を概観する。

岸本・由本 (2014) では、「教えに行く」「借りに来る」のような「動詞の連用形＋に＋動詞」という複雑述語構文を「再構成を起こす不定詞構文」と呼ぶ。岸本・由本 (2014) は複雑述語の統語構造に基づいて「動詞の連用形＋に＋動詞」という形式を持つ複雑述語と命名するが、本稿では、複雑述語内部の意味関係に着目し、命名する。「動詞の連用形＋に」という部分は行為の目的を表すため、「目的要素＋に＋移動動詞」のような移動の目的を表す複雑述語を行為目的型複雑述語と呼ぶ。

荘司 (1997) は「V に行く」構文の補文構造に関する研究を行った。荘司 (1997) では、以下の結論を得た。①「V に」と移動動詞の間にほかの語を挿入できる (例文(5))。② 連結構文での省略が可能である (例文(6) (7))。③ 前の「V に」だけが尊敬表現になれる (例文(8)) ことを指摘している。

(5) 確かに映画を見には行ったが、それは勤務時間外のことだ。

(荘司 1997: 49 例(33))

(6) ぜひまたわが家へ遊びに、娘の相手をしに来てください。

(荘司 1997: 49 例(35))

(7) 私はちょっとだけ話を聞きに、彼は単に冷やかしに行ったまでです。

(荘司 1997: 49 例(36))

(8) 傘をお取りに戻られる。

(荘司 1997: 49 例(37))

荘司 (1997) と異なり、本稿では、複雑述語内部の補文構造ではなく、「V に行く」のような行為目的型複雑述語の形態や、場所名詞や参加者が文中に明示される場合について、日本語と中国語の相違点を検討する。

3. 行為目的型複雑述語の構造の日中語対照

本節では、行為目的型複雑述語の内部構造に着目し、日本語と中国語の相違点を研究する。3.1 節では、日本語と中国語の行為目的型複雑述語の語順と構成要素を考察し、3.2 節では、複雑述語の目的要素を考察し、日本語と中国語の相違点を検討する。

3.1 行為目的型複雑述語の語順と構成要素の日中語対照

日本語の行為目的型複雑述語構造において、「目的要素＋に」は行為の目的を表し、移動動詞の直前に置かれる。

- (9) 彼はわざわざ敬意を表しに来る。
(10) 彼は明日泳ぎに行く。
(11) 彼はボールを拾いに走った。
(12) 私は山野を犬と一緒に狩りに歩く。

(『歴史上の本人』)

例文 (9)(10) では、動詞「表す」「泳ぐ」の連用形が助詞「に」と組み合わせさせて行為の目的を表し、移動動詞「来る」「行く」の前に置かれる。例文 (11)(12) でも同様に、動詞「拾う」「狩る」の連用形+「に」+方向性²を持たない移動動詞「走る」「歩く」という順序で、移動行為の目的を表す。つまり、日本語では、複雑述語の語順は動作が行う順序とは逆であり、「目的要素+に+移動動詞」という構造を用いて行為目的型複雑述語になる。一方中国語において、行為目的型複雑述語は動作が行う順序により並べる。

- (13) 他 特地 来 表达 敬意。
(彼 わざわざ 来る 表す 敬意)
「彼はわざわざ敬意を表しに来る」

- (14) 他 明天 去 游泳。
(彼 明日 行く 泳ぐ)
「彼は明日泳ぎに行く」

例文 (13) の“来表达”「表しに来る」において、動作“来”「来る」は先に行った。そのあと、目的を表す動作“表达”「表す」が行われるため、移動動詞“来”「来る」は目的を表す動詞“表达”「表す」の前に出る。例文 (14) では、“去游泳”「泳ぎに行く」も同様に、二つの動詞は動作前後により並べ、“去”「行く」という動作は“游泳”「泳ぐ」という動作の前に行く。そのため、移動動詞は目的を表す動詞の前に置かれる

例文 (13)(14) では、移動動詞“来”「来る」、「去”「行く」は方向性を持つため、直接に目的要素と組み合わせさせて複雑述語を構成することができるが、方向性を持たない移動動詞だけで複雑述語にならず、“去/来”「行く/来る」などの方向性を持つ移動動詞と共起しなければならない。

² 本稿における「方向性を持つ移動動詞」とは、「出る」(中から外へ)「入る」(外から中へ)のような動詞自体に移動の方向を含意される移動動詞を指す。「走る」「歩く」のような、動詞自体に移動の方向を含意されない移動動詞を「方向性を持たない移動動詞」と呼ぶ。

(15) 他 跑去捡球 了。

(彼 走る 行く 拾う ボール 完了)

「彼はボールを拾いに走った」

(16) 她 专门 从 那边 走来 问我 问题。

(彼女 わざわざ から その辺 歩く 来る 聞く 私 問題)

「彼女はわざわざその辺から私に問題を聞きに歩く」

例文 (15)(16) が示すように、中国語において、“跑”「走る」、「走」「歩く」のような方向性を持たない移動動詞が行為目的型複雑述語になるとき、移動動詞は直接に目的要素と共起できず、移動動詞の後ろに方向性を持つ動詞“去/来”「行く/来る」を付けなければならない。

日本語では、行為目的型複雑述語の語順は動作の行う順序と逆に、移動動詞の方向性の有無と関係なく、「目的要素＋に＋移動動詞」という構造を用いて構成される。中国語では、動作の行う順序によって複雑述語を構成する。方向性を持つ移動動詞は直接に目的要素と組み合わせ、複雑述語を構成できる。一方、方向性を持たない移動動詞は、「移動動詞＋“去/来”＋目的要素」という形式を用いて複雑述語になる。

3.2 行為目的型複雑述語の目的要素の日中語対照

本節では、日本語と中国語において、行為目的型複雑述語の目的要素を考察する。新井(2016)では行為目的型複雑述語の目的要素とする動作名詞³は名詞ではなく、動詞の連用形であると指摘している。本稿では、動詞の連用形だけでなく、動作名詞も目的要素になれると考えられる。

3.1 節では、例文 (9)(10) の「表しに来る」「泳ぎに行く」の示すように、単純動詞の連用形が目的要素になれることが分かった。しかし、日本語では、単純動詞の連用形だけでなく、複合動詞の連用形、動詞使役形式の連用形、動詞受身形式の連用形および動作名詞も目的要素とすることがある。

(17) 彼女は原稿を受け取りに行く。

(18) そのお婆さんは銀行の窓口で年金から小遣いを引き出しに来る。

(19) 先生は嘆願書を県庁に取り戻しに走る。

³ 本稿では、「回収」「考察」のような動作を表す名詞を単純動作名詞と呼び、「雪掻き」「井戸掘り」のような動詞句「雪を掻く」「井戸を掘る」に由来し動作を表す名詞を複合動作名詞と呼ぶ。

例文 (17) の「受け取りに来る」では、複雑述語における目的要素は複合動詞「受け取る」の連用形である。例文 (18)(19) でも同様、移動動詞「行く」「走る」は複合動詞「引き出す」「取り戻す」の連用形と共起する。

(20) その人は島の火山を爆発させに行く。

(21) 猫は鼠をとるのが得意で、主人に死骸を見せに来る。

例文 (20)(21) の示すように、移動動詞「行く」「来る」は「爆発させる」「見せる」のような動詞使役形式の連用形と共起できる。

(22) 猫カフェに癒されに行く。

(23) 無謀です。ヌムたちに殺されに行く。

(『女王陛下のアルバイト探偵』)

例文 (22)(23) では、動詞「癒す」「殺す」の受身形式「癒される」「殺される」の連用形も移動動詞「来る」の目的要素になれる。

(24) 今週末、小学生たちは博物館に見学に行く。

(25) ごみを回収に来る。

例文 (24)(25) では、移動動詞「行く」「来る」は単純動作名詞「見学」「回収」と共起する。日本語では、単純動作名詞は行為目的型複雑述語の目的要素になることができる。

例文 (24)(25) の示すような普通名詞以外、例文 (26)(27) の「雪掻き」「井戸掘り」のような複合動作名詞も目的要素になれる。

(26) 彼は雪掻きに行く。

(27) その人は井戸掘りに来る。

日本語の行為目的型複雑述語では、単純動詞の連用形、複合動詞の連用形、動詞使役形式の連用形、動詞受身形式の連用形などの動詞の連用形や動作名詞が行為目的型複雑述語の目的要素になれる。しかし、中国語では、移動動詞は単純動詞、または、複合動詞と共起しない。例文 (28)(29) の示すように、“来取”「取りに来る」「去见”「会いに行く」のように、移動動詞“来”「来る」「去”「行く」は単純動詞“取”「取る」「见”「見る」と共起する。

- (28) 她 来 取 原稿。
(彼女 来る 取る 原稿)
「彼女は原稿を取りに来る」
- (29) 我 去 见 我 女朋友。
(私 行く 見る 私 彼女)
「私は彼女に会いに行く」
- (30) 他 去 攀登 珠穆朗玛峰 了。
(彼 行く 攀じる+登る エベレスト 完了)
「彼はエベレストに登りに行った」
- (31) 我 来 检查 身体。
(私 来る 検査する+調べる 体)
「私は診察しに来る」

例文 (30)(31) の示すように、複合動詞“攀登”「登る」、「検査」「診察する」も移動動詞“去”「行く」の目的要素になれる。

日本語と異なり、中国語は孤立語であるので、使役・受身の形態的標示がない。そのため、例文 (32)(33) の示すように中国語の行為目的型複雑述語では、動詞の使役、受身形式は目的要素にならない。

- (32) *那个人 去 让 火山 爆发。
(その人 行く させる 火山 爆発する)
(その人は火山を爆発させに行く)
- (33) *他 去 猫咪咖啡馆 被 治愈。
(彼 行く 猫カフェ される 癒す)
(猫カフェに癒されに行く)

中国語では、名詞としても動詞としても使われる語が存在している。例えば、“面试”「面

接/面接する」「旅行」「旅行/旅行する」⁴である。しかし、例文 (34)(35) の「面試」「面接する」「旅行」「旅行する」が目的要素になるとき、動詞として使われていると解釈される。

(34) 他 今天 去 面试。
(彼 今日 行く 面接する)
「今日、彼は面接しに行く」

(35) 他 下周 去 旅行。
(彼 来週 行く 旅行する)
「彼は来週旅行に行く」

日本語において、移動動詞は、単純動詞の連用形だけでなく、複合動詞の連用形、動詞使役形式または受身形式の連用形および動作名詞とも共起できる。これに対し中国語では、移動動詞は単純動詞、複合動詞としか共起できず、名詞、動詞の使役形式や受身形式と共起できない。

4. 行為目的型複雑述語構文の日中語対照

本節では、行為目的型複雑述語構文に存在する場所名詞、共同参与者および動作の実現状況に着目し、日中語の相違点を研究する。4.1 節では、場所名詞がある場合、日中語の行為目的型複雑述語の相違点を考察する。4.2 節では、共同参与者が文脈に明示される場合、日中語の相違点を考察する。4.3 節では、過去を表す構文に、移動の動作と目的動作の実現状況に注目し、日中語の行為目的型複雑述語を考察する。

4.1 行為目的型複雑述語構文における場所名詞

本節では、場所名詞が存在する場合、日中語の行為目的型複雑述語の相違点を検討する。本稿の以下では、 により場所名詞を示す。

日本語において、場所名詞は複雑述語全体の前に置く場合がある。

⁴ 中国語の「面試」「面接/面接する」「旅行」「旅行/旅行する」の動詞用法と名詞用法について、以下の例文を用いて説明する。

他今天作为考官面试新人。「彼は面接官として面接者を面接する」(動詞用法)
他今天有一个面试。「今日、彼は一つの面接がある」(名詞用法)

他要去泰国旅行。「彼はタイ国に旅行するつもりだ」(動詞用法)
他很喜欢旅行。「彼は旅行が好きだ」(名詞用法)

- (36) スポーツ用品店に靴を買いに走る。
(37) 小学生はお父さんと近場で遊びに行く。
(38) 朝一番で会社に届けに行く。

例文 (36)(37)(38) では、場所名詞「スポーツ用品店」「近場」「会社」は複雑述語の前に置く。例文 (39)(40) のように、場所名詞は移動動詞の直前に置く場合がある。

- (39) 太郎が次郎に会いに神戸へ行った。
(40) 太郎が本を借りに図書館に行った。

日本語では、場所名詞は複雑述語全体の前に置いても、移動動詞の直前に置いても、移動の目的地を表す。

中国語では、場所を表す名詞は一般的に移動動詞の直後に置く。例文 (41)(42) の示すように、場所名詞は移動動詞“去”「行く」と目的を表す動詞“学习”「学ぶ」「买”「買う」の間に置かれる。

- (41) 我 去 图书馆 学习。
(私 行く 図書館 学ぶ)
「私は図書館に学びに行く」

- (42) 他 明天 去 书店 买 书。
(彼 明日 行く 本屋 買う 本)
「彼は明日に本屋に本を買いに行く」

しかし、中国語においては、例文 (44)(46) のように、場所名詞は複雑述語全体の直後に置く場合もある。

- (43) 我 今天 中午 去 食堂 吃。
(私 今日 昼 行く 食堂 食べる)
「私は今日の昼に食堂にご飯を食べに行く」

- (44) 我 今天 中午 去 吃 食堂。
(私 今日 昼 行く 食べる 食堂)
「私は今日の昼に食堂(のもの)を食べに行く」

例文 (43) の示すように、中国語において、場所名詞“食堂”「食堂」は移動動詞“去”「行く」と行為の目的を表す動詞“吃”「食べる」の間に置き、“去食堂吃”「食堂に食べに行く」という構造になる。この場合、“食堂”「食堂」は移動の目的地のみを表し、食べるものは食堂のものに限らず、自分で作ったおにぎりやお弁当なども構わない。例文 (44) のように、場所名詞“食堂”「食堂」は複雑述語“去吃”「食べに行く」の後ろに置き、“食堂”「食堂」は移動の目的地だけでなく、「食堂の食べ物」も指す。この場合、自分で作ったお弁当などではなく、食堂のものしか食べられない。

(45) 他 (拿着衣服) 去 房间 收拾。
(彼 服を持っている 行く 部屋 片付ける)
「彼は服を持って部屋に行つて(その服を)片付ける」

(46) 他 去 收拾 房间。
(彼 行く 片付ける 部屋)
「彼は部屋を片付けに行く」

例文 (45) では、場所名詞“房间”「部屋」は服を片付ける場所のみを表す。服を持ちながら部屋へ行って片付けることを表す。例文 (46) では、場所名詞“房间”「部屋」は移動の目的地および部屋の中のものを表す。この場合、例文 (47) のような服を持ちながら部屋に行つて片付けることを表せず、例文 (48) のような部屋へ行って部屋の中の服を片付けることを表す。

(47) *他 拿着衣服 去 收拾 房间。
(彼 服を持っている 行く 片付ける 部屋)
(彼は服を持って部屋へ行って、その服を片付ける)

(48) 他 去 收拾 房间里 的衣服。
(彼 行く 片付ける 部屋 中 の 服)
「彼は部屋の中の服を片付けに行く」

日本語では、場所名詞は構文に存在する位置に関わらず、移動の目的地を表す。日本語と異なり、中国語では、場所名詞は移動動詞の後ろに置く場合、移動の目的地のみを表し、複雑述語全体の後ろに置く場合、その場所だけではなく、場所に存在するものも表す。

4.2 行為目的型複雑述語構文における共同参与者

本節では、行為目的型複雑述語構文において、共同参与者がある場合、日本語と中国語相違点を検討する。本稿の以下では、共同参与者を単に参与者と呼び、 により参与者を示す。

日本語では、参与者がある場合、ト格で参与者を提示し、複雑述語の前に置く。

(49) 彼は上司と話しに来る。

(50) あの老人は毎月に孫と遊園地に遊びに行く。

中国語では、参与者がある場合、2つの構造がある。一つは例文 (51)(53) のように、参与者は複雑述語全体の前に置かれる。もう一つは例文 (52)(54) のように、参与者は移動動詞の後ろに置かれる。

(51) 我 和 小李 来 买 东西。

(私 と 李さん 来る 買う もの)

「私と李さんとはものを買いに来る」

(52) 我 来 和 小李 买 东西。

(私 来る に 李さん 買う もの)

「私は李さんのところへ行って、李さんからものを買う」

例文 (51) では、動作主“我”「私」と参与者“小李”「李さん」は一緒にものを買に行くという意味を表す。動作主と参与者は同一の目的（ものを買う）のために移動する。一方、例文 (52) では、参与者“小李”「李さん」はもの売る人であり、動作主“我”「私」はまず参与者“小李”「李さん」のところへ行って李さんからものを買うことを表す。「ものを買う」という移動の目的は動作主“我”「私」だけの目的である。

(53) 我 和 小王 去 学 做饭。

(私 と 王さん 行く 学ぶ 料理)

「私と王さんとは料理を学びに行く」

(54) 我 去 和 小王 学 做饭。

(私 行く に 王さん 学ぶ 料理)

「私は王さんのところへ行って、王さんから料理を学ぶ」

例文 (53) では、動作主“我”「私」は参与者“小王”「王さん」と一緒に料理を学ぶために行くという意味を表す。「料理を学ぶ」は私と王さんの移動の目的である。一方、例文 (54) では、王さんは料理が上手だから、私は王さんから料理を学ぶという目的のために行く。料理を学ぶ人は動作主“我”「私」だけである。

日本語では、参与者は複雑述語全体の前に出て、動作主と同一の目的を持ち、一緒に移動する。これに対し中国語では、参与者の位置により構文の意味が異なる。参与者は複雑述語全体の前の場合、動作主と参与者は同一の目的を持って移動するということを表し、参与者は移動動詞の後ろの場合、動作主だけが目的を持って移動することを表す。

4.3 行為目的型複雑述語構文における動作の実現

本節では、過去を表す構文に着目し、移動動作と目的を表す動作の実現状況を中心に、日本語と中国語の異なるところを検討する。

(55) 彼は本を借りに行った (が、借りられなかった)。

例文 (55) の複雑述語「借りに行った」では、「行く」という移動動作が実現したことが分かり、「借りる」という動作が実現した場合も実現しない場合も存在している。

中国語学において、“了”⁵を用いて動作の完了を表れる。本節では、中国語における動作の完了を表す助詞“了”は構文中の位置により行為目的型複雑述語構文の意味が異なる。

(56) 他 去 借 书 了, 但 没 借到。
(彼 行く 借りる 本 完了 しかし NEG 借りられる)
「彼は本を借りに行ったが、借りられなかった」

(57) 他 去 借 了 书。
(彼 行く 借りる 完了 本)
「彼は行って本を借りた」

⁵ 朱徳熙 (1982) や呂叔湘 (1980) では、中国語の“了”は二つの用法があると指摘している。動詞の後ろに置いてアスペクトを表わす“了”を“了₁”と呼び、文末に置いて語気助詞とする“了”を“了₂”と呼ぶ。“了₁”と“了₂”は両方とも「動作の完了」あるいは「過去の出来事を表す」ことを表れる。本稿では、動作の完了を表す“了₁”と動作の完了を表す“了₂”を「完了助詞“了”」と呼ぶ。

例文 (56) では、完了助詞“了”は文末に置かれる。この場合、発話者の移動動作“去”「行く」が実現したことは分かるが、目的を表す動作“借”「借りる」の実現状況は分からない。例文 (57) では、完了助詞“了”は複雑述語“去借”「借りに行く」の直後に置かれる。この場合、発話者の移動動作“去”「行く」も目的を表す動作“借”「借りる」とも実現したことが分かる。

日本語では、過去を表す構文において移動動作が実現したが、目的を表す動作の実現状況が不明である。一方中国語では、完了助詞“了”の位置に関わり、完了助詞“了”は文末に置かれる場合、日本語と同様に、移動動作が実現したが、目的を表す動作の実現状況が不明である。完了助詞“了”は複雑述語の直後に置かれる場合、移動動作と目的を表す動作は両方とも実現したことが分かる。

5. まとめ

本稿では日本語と中国語における行為目的型複雑述語を対照し、共起する要素や動作の実現状況などに着目した分析を行った。結論は次の通りである（以下の表にもまとめる）。

第一に、日中両言語における行為目的型複雑述語の語順と構成要素を対照し、相違点を明らかにした。日本語では、動作の行う順序と逆に、「目的要素+に+移動動詞」という構造を用いて行為目的型複雑述語になる。一方、中国語では、動作の行う順序に従う。方向性を持つ移動動詞は目的を表す動詞と直接共起でき、方向性を持たない移動動詞は“去/来”と組み合わせさせて目的を表す動詞と共起する。

第二に、日中両言語における行為目的型複雑述語の目的要素に関して、相違点と共通点を解明した。両言語に共通しているのは、日本語と中国語において、単純動詞と複合動詞のいずれも行為目的型複雑述語の目的要素になれる。さらに日本語では、動詞使役形式または受身形式の連用形および動作名詞も行為目的型複雑述語の目的要素になれるが、中国語では、動詞使役形式、受身形式および動作名詞は目的要素にならない。

第三に、行為目的型複雑述語構文に存在する場所名詞、共同参与者および動作の実現状況に着目し、日中両言語における行為目的型複雑述語の相違点を明らかにした。日本語では、行為目的型複雑述語構文の意味は場所名詞、共同参与者などの位置と無関係である。中国語では、行為目的型複雑述語構文の意味は場所名詞、共同参与者の位置と関係がある。つまり、場所名詞は移動動詞の後ろに置かれる場合に目的地のみを表し、複雑述語全体の後ろに置かれる場合に目的地だけでなくその場所に存在する物を表す。参与者が複雑述語全体の前に置かれる場合、動作主と参与者は同一の目的を持って移動することを表し、移動動詞の後ろに置かれる場合、動作主だけが目的を持って移動することを表す。

第四に、過去を表す構文において、日中両言語の行為目的型複雑述語における動作の実現状況が異なることを明らかにした。日本語の過去を表す構文では、移動の動作が実現済

みで目的を表す動作の実現状況不明である。一方、中国語の過去を表す構文では、完了助詞“了”が文末の場合、移動動作は実現したが目的を表す動作の実現状況は不明である。完了助詞“了”が複雑述語の直後の場合、移動の動作も目的を表す動作も実現したことが含意される。

本研究の1つの大きな結論として、中国語では構文における語順が意味解釈の違いに大きく関わる点を指摘できる。

【表】日中語の行為目的型複雑述語の対照

	日本語	中国語
語順	動作の行う順序と逆	動作の行う順序
構成要素	方向性を持つ移動動詞： 目的要素＋に＋方向性移動動詞	方向性を持つ移動動詞： 方向性移動動詞＋目的要素
	方向性を持たない移動動詞： 目的要素＋に＋非方向性移動動詞	方向性を持たない移動動詞： 非方向性移動動詞＋“去/来”＋目的要素
目的要素	単純動詞の連用形 複合動詞の連用形 動詞の使役形式の連用形 動詞の受身形式の連用形 単純動作名詞 複合動作名詞	単純動詞 複合動詞
場所名詞	複雑述語全体の前： 移動の目的地を表す	複雑述語全体の後ろ： 移動の目的地と目的地のものを表す
	移動動詞の前： 移動の目的地を表す	移動動詞の前： 移動の目的地を表す
参与者	複雑述語全体の前： 同一の目的を持ちながら移動する	複雑述語全体の前： 同一の目的を持ちながら移動する
	移動動詞の後ろ：×	移動動詞の後ろ： 動作主だけが目的を持って移動する
動作の実現	移動の動作が実現済み、 目的を表す動作の実現状況不明	完了助詞“了”が文末： 移動の動作が実現済み、目的を表す動作の実現状況不明
		完了助詞“了”が複雑述語の直後： 移動の動作も目的を表す動作も実現済み

略語

NEG: 否定

参考文献

- 新井 文人 (2016) 「日本語の『V に行く』の統語構造と意味構造に関する一考察」
『Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : トークス』19 卷, 1-16.
- 影山 太郎・由本 陽子 (1997) 「単語を超えた語形成」中右実 (編)『語形成と概念構造』
128-197. 研究社出版.
- 岸本 秀樹・由本 陽子 (2014) 『複雑述語研究の現在』ひつじ書房.
- 荘司 育子 (1997) 「日本語の補文構造に関する一考察 —『V に行く』構文について—」『日
本語・日本文化』(23). 39-53.
- 松本 曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」中右実 (編)『空間と移動の表現』125-230.
研究社出版.
- 三宅 知宏 (1996) 『日本語の移動動詞の対格標示について』『言語研究』第 110 号. 143-168.
- 朱 德熙 (1982) 『语法讲义』商务印书馆.
- 朱 蓓 (2007) 「现代汉语位移动词研究综述」(「現代中国語移動動詞研究総論」)『牡丹江师
范学院学报 (哲社版)』总第 137 期. 59-61.
- 呂 叔湘 (1980) 『现代汉语八百词』商务印书馆.